

# 大学英作文指導における語法添削資料 —文型・動詞型編—

磐崎弘貞

## 1. 序

本稿に収録する資料は、筆者の英作文授業において、添削システムと独習システムの統合を目標として計画され、実際に使用されてきたものの一部である。ここでは、その資料作成の背景を説明しておきたい。

一般に、英作文練習においては、以下のような誤りが生じる。

- 1) 語彙的誤り (lexical errors)
- 2) 文法的誤り (grammatical errors)
- 3) 論理・文章構成に関する誤り (logical/organizational errors)

「語彙的誤り」とは、たとえば動詞 suggest を \*suggest him to go のように、V NP to do という誤った動詞型で用いるような場合で、個々の語彙項目特有の問題に起因する誤りである。「文法的誤り」は、より広い意味での統語的諸問題に関わるもので、たとえば、能動文から受動文が適格に作れない、といった問題である。「論理・文章構成」に関する誤りは、たとえば、ディバートの主張方法である「主張 (claim) — 論拠 (warrant) — データ (data)」といった論理の流れに不適格な部分があるもの、あるいは「トピック・センテンス → サポート・アイディア」といった文章構成法に関する誤りなどが該当する。

こうした観点は、互いに交錯しており、必ずしも明確に境界線を引けるものではないが、日本人学習者向けの英作文参考書は、いずれかに論点を置いたものが多い。たとえば、語彙的誤りについては、松本・松本 (1976)、望月 (1991, 1994)、小笠原 (1997) などが詳しく、文法的誤りを主体としたものには、萩野 (1998)、小寺 (1989)、松井 (1979) などがある。この点、広く TEFL/TESL 学習者を対象とした Swan (1995) は、語彙項目を中心としながらも、文法指導との融合を試みている。論理・文章構成に関する問題については、Axelrod &

\* 本稿は、1999年度筑波大学学内プロジェクト奨励研究(B)の補助を受けた研究「WWWを利用した英作文指導と学習者コーパスの構築・分析」の成果の一部である。

Cooper (1988)のようなネイティブ向けの包括的なものや、ディベート関連では多数あるが、日本人英語学習者向けは必ずしも多くはない。しかし、加藤 & Hardy (1992)、天満(1998)などが数少ない例と言えよう。

こうした誤りには、言語内に起因する「言語内誤り」(intralingual errors)と、2つの言語の干渉によって生じる「言語間誤り」(interlingual errors)があることが知られている(Richards ed. 1974)。これは、外国人の英作指導においては、母語とターゲットとなる英語を比較・関連させて指導する必要性が高いことを示している。よって、本指導においては、Swan(1995)のように、語彙指導と文法指導の融合を試みているが、学習者のエラーに基づいて、日本人向けに特化した記述をしている部分が多い。

## 2. 本英作指導環境の特徴

そうした点も踏まえて、本英作文指導では、以下のような方法で、効果的な英作環境を目指した。

### 2.1. 電子メールを利用した個人指導

課題提出・返却には電子メールを利用し、それによって、学習者のエラーが数値的に把握しやすく、また特定の文字列を検索しやすいようにした。提出された英作文は、後述の方法で添削された上で返送され、再提出・再添削を受けるシステムとした。

よって、指導の数時間は、コンピュータの操作方法、電子メールの利用法、ワープロソフトの利用法、スペルチェッカの利用法等に費やされている。

### 2.2. 校正記号

英作文指導では、個人的な添削が不可欠である。しかし、問題点を、毎回文章化していたのでは、クラス全員の添削をするには時間的制約がありすぎる。よって、単数形と複数形の混同といった、比較的簡単なものについては、添削記号のみで指摘をしている。

例：I browsed through more than 100 <page> (S/PL) yesterday.

(く)が問題ある語句を指摘、その問題点を記号(ここでは、単数・複数の混同を指摘するS/PL)で提示している)

以下は使用した記号の凡例である。

使用記号	意 味	例
AGR	agreement: 姓・数・人称等の呼応・一致を確認せよ。	He <u>come</u> to the office and <u>do</u> this first.
ASPECT	aspect: アスペクト（単純形・完了形）の区別は適切か。	My sister <u>learns soccer</u> for five years.
C/U	countable or uncountable: 名詞の可算・不可算を確認せよ。	He has a lot of <u>informations</u>
DET	determiner: 冠詞、所有代名詞等を確認せよ	This is one of <u>advantages</u> .
DIC	dictionary: 関連する個所の辞記述を参照せよ。関連する事項が書いてあるはず。	She is such a good <u>chairman</u> .
GC	grammatical collocation: 文法的連結（動詞型、名詞型、形容詞型）を確認せよ。	He <u>suggested</u> to go. I read a <u>book</u> that tigers are disappearing from the earth.
GOOD	good: (いろいろな意味合いで) 適切な表現である、ひじょうにうまく処理している。	
INDENT	indent: (新しいパラグラフには) インデントが必要。	This is what I did yesterday. ↑ INDENT
LC	lexical collocation: 語彙連結を確認せよ。	<u>Watch this map!</u>
OK?	OK?: (いろいろな場合に) この個所を再考せよ。	He <u>taached</u> math.
ORIG	original: 原文はこういうことか；訳文が原文の意味とずれている。	お金を貸してほしいと彼にお願いした。I <u>told</u> him to lend me some money.
P	paragraph: 新しいパラグラフにせよ。	
POS	part of speech: 品詞選択は正しいか。	He didn't <u>apology</u> .
Spell	spelling: 綴りを確認せよ。	I don't like <u>grammer</u> .

S/PL	singular or plural: 名詞の単数・複数を確認せよ。	He is one of my good <u>friend</u> .						
Sylb	syllabication: 分節法が不適切、辞書で分節法を確認せよ。ワードラップせよ。	<table><tr><td>.....</td><td><u>perf-</u></td></tr><tr><td><u>ect</u></td><td>..... <u>exe</u></td></tr><tr><td colspan="2"><u>-cutive</u></td></tr></table>	.....	<u>perf-</u>	<u>ect</u>	..... <u>exe</u>	<u>-cutive</u>	
.....	<u>perf-</u>							
<u>ect</u>	..... <u>exe</u>							
<u>-cutive</u>								
TNS	tense: 動詞の時制はこれでよい か。現在・過去・未来が適切に 区別されているか。	When he <u>will come</u> back, I'll ask him.						
VOC	vocabulary: この語彙の選択は正 しいか；類語に、より適切なも のがないか考察せよ。	His voice <u>looked</u> sad.						
VOICE	voice: 態(voice)の選択は正しい か；能動態(active voice)と受動 態(passive voice)の使い分けを 意識しているか；能動形にして 動詞型を確認せよ。	He <u>was demanded</u> money.						
→'xxx',	別紙で配布したポイント説明 「xxx」を参照して再考せよ。	That's <u>the country he lived</u> . → '関係詞(1)'						
?	?: 意味不明。							
NO COPY	no copy: 友人の提出物を写した り、写させたりするのは、お互 いの時間の無駄なので止めるこ と。							
Proofread	proofread: 校正が(ほとんど) なされていないので、よく見直 す習慣を付けること。							

### 2.3. WWWを利用した資料参照

記号以上の説明が必要な場合は、参照資料の項目名を記した。英作におけるエラーは、共通の問題点もあるが、大半は個人的なものである。よって、前者については、受講生全員に対する説明も有効であるが、後者については、個人レベルで資料を参照させるシステムが妥当である。この場合、Swan(1995)の

ような書籍を共通参考図書として購入させ、それを利用することも考えられる。

ただし、筆者が想定する、日本人に特化した記述が不足しており、説明記述についてもどうしても不満が残るため、こうした問題点を独自のワークシートにして配布している。この場合、紙で配布した場合は、その数は膨大になり、また、改訂した場合には再配布が必要など、問題点が残る。そこで、ホームページ([www.sakura.cc.tsukuba.ac.jp/~iwasakih/](http://www.sakura.cc.tsukuba.ac.jp/~iwasakih/))に資料を置き、それを参照させる方式に移行中である。

例：That is the machine<what>（「what」を参照）he used for the purpose.

（〈 〉により問題ある語句を指摘、その説明はオンラインの項目「what」を参照させる）

#### 2.4. 簡潔な、そして一般化された記述

参照させる添削用語法データは、極力簡潔で、問題点がわかりやすいようにした。文法用語も最小限にし、必ずしも言語学的に厳密ではない記述や、独自の名称を用いた場合がある。

また、できるだけ、1つの記述が他の部分に应用できるようにした。よって、入口は語彙的誤りでも、それが実際には汎用な語法・文法上の誤りであり、その背後にある大原則が理解できるようにした。これにより、類型化・一般化した記述によって、原則を理解させることを目指した。

たとえば、動詞は何であれ、以下のような受動文の誤りを理解するには、能動文で考えるのが鉄則である。

\*I was often *said*, "You run very fast."

つまり、この場合、対応する能動文

\* (People) *said me*, "You run very fast."

が不適格であるため、能動文も不適格である。その点、以下のような動詞型ならば適格である。

People often *said to me /told me*, "You run very fast."

I was often *told*, "You run very fast."

しかし、こうした確認のため、受動文→能動文という、変換作業をしようとしても、意外にも、これができない学習者が多々いるのが観察される。こうした現状を踏まえ、できるだけ、汎用的な誤りを取り上げながら、それをいかに学習者自身がモニタできるかに留意した資料を構築していった。

### 3. 収録したデータについて

こうした点に配慮して作成した資料の一部を掲載したのが本稿である。実際の資料は多岐に渡り、分量も4倍程度あるが、ここでは、文型・動詞型に関わるものに限定して掲載した。取り上げた項目は以下の通りである（検索用語と日本語タイトルを示す）。前半が特定の語彙項目に関するもの（英語見出し）、後半がより一般的な文法・語法説明（日本語見出し）となっている。

as...as	as ~ as は比較の物差部分を囲い込む
be	「A は B である」がいつも"A is B"であるとは限らない
each other	each other は代名詞だから、他動詞・前置詞の目的語として使う
easy	EASY 型形容詞は、主語と目的語の関係が特殊
the+比較級	The 比較級 + the 比較級では、何が比較級になるのか注意せよ
think/feel	「どう思うか」は think の動詞型に注意してWH移動せよ
to 不定詞	「名詞句 to 動詞句」型の構造と意味：名詞を修飾する to 不定詞には3つの型がある
WH 疑問文	WH 疑問文では、聞きたい部分が名詞か否かに注意せよ
what	what は先行詞を含んだ関係代名詞
what (2)	語順変換方式による what 簡易派生法：名詞を what に変えて左方移動せよ
関係詞	関係代名詞を作るステップ：文を名詞に後続させただけでは不可
関係詞(2)	語順変換方式による関係代名詞の簡易派生法：被修飾語を左方移動せよ
関係詞(3)	関係詞を避けた方がいい場合もある
受動態	動詞の後に名詞が残っている受動文には疑いを持って
随伴規則	「WH 語 + 名詞」には随伴規則を適用せよ
随伴規則(2)	「how + 形容詞／副詞」には随伴規則を適用せよ
使役動詞	使役動詞 make/let/have をどう使うのか
動詞	他動詞は名詞を取り、自動詞は取らない
動詞(2)	引用句を取れる伝達動詞は that/wh/if 節を取れる他動詞
副詞節	言った内容かどうか：副詞節・句の移動

こうした資料は現在も追加・改訂作業中であり、その意味では、決して終わりの来ない作業である。ここに収録することにより、他の英作指導者にも参照していただきたく、また、順次 web に登録するデータについても、広く第三者からご意見をいただくことができれば幸いである。

#### 4. 英作指導用データ集

以下、1行目に検索用キー、次に簡単な説明と典型的誤りを示す用例、そして、その下に詳しい説明があり、最後に練習問題と解答という構成となっている。なお、項目によっては、セクションに分かれている場合がある。

as ...as
----------

as ~ as は比較の物差部分を囲い込む
-----------------------

*She looks young as much as her daughter.
-------------------------------------------

##### ●同等比較は as much as だけではない

as ~ as は程度が同じことを示し、いわゆる同等比較と呼ばれる構造だが、以下のように述べると、いずれも非文となる。

1) \*She looks young as much as her daughter.

(彼女は、自分の娘ほど若く見える。)

2) \*Those guys are working on the program hard as much as our engineers.

(あの連中は、我々のエンジニアと同じくらい熱心にそのプログラムに取り組んでるよ。)

いずれも、同等比較は単に as much as をつければ良いと誤解した結果である。

##### ●程度を表わす部分と'very' test

これを改善するために、知っておかなくてはならない点は、比較するためには、程度を表わす語が必要であり、as ~ as はその部分を囲い込むように配置するということである。例えば、「女性らしさ」には程度があるが、「女性であること」に程度はない。同様に、「机が整頓されているかどうか」には程度があるが、「机」そのものには程度がない。

では、1)2)の文において、どれが程度を表わす語かということ、as ~ as 以下を除いた部分に対して、程度を強調する very を付けてみればすぐわかる。She や the program に very がつくはずはなく、次のようになる。

3)a. She looks very young.

b. \*She looks young very much.

4)a. Those guys are working on the program very hard.

b. \*Those guys are working on the program hard very much.

つまり、「程度を表わすのは形容詞や副詞」なのである。よって、as ~ as で囲むのは、それぞれ young/hard である。

5) She looks as young as her daughter.

6) Those guys are working on the program as hard as our engineers.

では、次の文では何が誤りであるのか。

7) \*He has composed songs as much as Jack.

(彼はジャックと同じくらい作曲している。)

この場合も、比較の程度を示す部分を明らかにするため、very を入れてみよう。すると、

8) \*He has composed very songs.

ではないことが分かる。名詞 songs 自体に程度はない。かと言って、

9) \*He has composed songs very much.

でもなく、正解は、数が問題なのだから、

10) He has composed very many songs.

である。songs には程度がないが、many books であるかどうかには程度が生じる。よって、同等比較にすると、

11) He has composed as many songs as Jack.

となる。この場合は、many は名詞 songs を修飾しているから、as ~ as も名詞句全体につける。

なお、当然ながら、as much as になる場合も存在する。例えば、

12) He eats very much. (彼は大食いだ。)

と言えるから、次のようになる。

13) He eats as much as my brother.

### ●手順のまとめ

以上の手順をまとめると、次のようになる。

14) 比較尺度の部分の発見と、as ~ as の用い方

a. 比較の部分、つまり as ~ as をまず除外して考えてみる。

b. そこで、比較の尺度となる部分は、当然程度差が存在する語であるから、程度が大きいことを示す強意語 very を加えてみる。



- c. それによって修飾される部分が比較の尺度となる部分であるから、その語（「形容詞＋名詞」なら名詞句全体）を as ～ as で囲い込む。ただし、very は消去しておくこと。

## 問題

次の英文を訂正せよ。

- 1) \*She sings well as much as Lucy.  
(彼女はルーシーと同じくらい歌がうまい。)
- 2) \*Come back early as soon as possible.  
(できるだけ早く帰ってきてね。)
- 3) \*Sam has girlfriends as much as Mike.  
(サムはマイクと同じくらいガールフレンドがいるんだ。)

## 解答

- 1) She sings as well as Lucy.
- 2) Come back as early as possible./ Come back as soon as possible.
- 3) Sam has as many girlfriends as Mike (does).  
Cf. She is as pretty a woman as Jill. (語順に注意)

be

「AはBである」がいつも "A is B" であるとは限らない

"What would you like to have?" \*I'm a steak."

日本語における「AはBである」という表現はその場の文脈にかなり依存した表現である。だから、英語を作る際には、日本語的に全て "A is B." としてしまうと誤りで、その場面場面に応じた語彙・文構造を用いる必要がある。例えば、次のような文を考えてみよう。

- 1) (レストランでの注文) 「僕はステーキ。」

これを日本語そのまま

- 2) \*I'm a steak.

例えば、「私はステーキそのものですよ」ということである。よって、次のような表現を使うのが適切である。

- 3) a. Steak, please.  
b. I'll have a steak.

## c. Give/Get me a steak, please.

どうしてこのような違いが出てくるかというと、日本語の「AはBである」という表現において、必ずしもAが文の主語ではないからである。つまり、日本語の格助詞「は」は、主語を表わすというよりも、一般的には「Aについて話しますよ」という話題を導入する表現なのである。よって、これは英語の as for などに等しいものであり、その結果、日本語の「AはBである」は4a)ではなく、4b)のようにパラフレーズできることになる。

4)a. \*A is B.

b. As for A, it is B (that A does,...).

これは it ~ that の強調文で、場合によっては that 節が省略される。つまり、「Aに関して言うと、(何かが) Bである」ということである。

例えば「この犬は短足だ」という文は、「この犬」が主語というよりは、「この犬に関して言うと、足が短い」ということを表わしている。よって、これを4b)に従ってパラフレーズすると、次のようになる。

5) As for this dog, it is short legs that it has.

もちろん、これを文脈に応じて、

6) a. This dog's legs are short.

b. This dog has short legs.

などと表現することになる。ただし、7)でないことだけは明らかである。

7) \*This dog is short legs.

よって1)の「僕はステーキ」という文も、文の解釈は

8) As for me, it is a steak that  $\left\{ \begin{array}{l} \text{I'd like.} \\ \text{I want to have.} \\ \text{I want to order.} \end{array} \right\}$

というふうに、that 以下を補って考えておく必要がある。すると当然、実際の場面では3)のような表現が出てくることになろう。

では同様に、次の例を考えてみよう。

9) 「今日はカゼなんです。」

前例同様、これを10)のように訳すと不適切となる。

10) \*Today is a cold.

また、11) のようにしたのは、今度は私が「カゼの病原菌」になってしまう。

11) \*I am a cold today.

そこで、この場合も4b) のパラフレーズに従うと、次のようになる。

12) As for me, it is a cold that I have.

よって、これを日常的な英語にすると、次のようになろう。

13) a. I have a cold today.

b. I've caught a cold today.

c. I'm suffering from a cold today.

のように、日本語の「AはB」＝"A is B"という単純な図式にしてしまわずに、文脈上の意味を考えてみる必要がある。

### 練習問題

日本語に対応する英文を訂正して、全文を記せ。

1) 「私は野球が好きだけど、あなたは？」

「僕はプロレス。」

"I love baseball. How about you?"

"\*I'm professional wrestling."

2) 彼は高所恐怖症だ。

\*He is an acrophobia.

3) 今日は疲れたよ。

\*Today is tired.

### 解答

1) a. I love professional wrestling.

b. Professional wrestling is my favorite.

2) a. He has acrophobia.(acrophobia は症状そのもので不可算名詞)

b. He is acrophobic.(acrophobic は形容詞)

c. He is an acrophobe.(acrophobe は「高所恐怖症の人」で可算名詞)

d. He is afraid of being in a high place.

3) a. I was tired today.

b. I had a busy day today.

c. Today was a tiring day.

each other
------------

each other は代名詞だから、他動詞・前置詞の目的語として使う
-------------------------------------

*They shook hands each other.
-------------------------------

相互代名詞と呼ばれる each other は、意味的には「お互いに」ということである。しかし日本語の「お互いに」とは、用法の上で大きな違いがある。たとえば、「連中は話をした」は They talked. だが、「お互いに」というのを入れたい場合、日本語ではそのまま付けければよいが、英語では単に each other を付けただけではいけない。

1) \*They talked *each other*.

これはなぜかという点、「お互いに」が副詞であるのに対し、each other は名詞の働きをする代名詞だからである。よって、each other が生じるのは、名詞の生じる位置ということになる。ただし、一般の名詞とは違って、主語や動詞の補語にはならず、他動詞の目的語、または前置詞の目的語として用いる。

「お互いに話した」という表現をするには、例えば「ジョンと話した」という表現を考えてみて、その「ジョン」の代わりに「お互い」を入れればよい。

2) a. They talked \*John /\*each other.

b. They talked *with* John /each other.

同様に、

3) They passionately kissed *each other* in front of us.

(彼らは私達の前で情熱的なキスをした。)

は、kiss が目的語 (=名詞) を取れる他動詞なので可能だが、

4) \*They shook hands each other.

(連中はお互いに握手した。)

は非文である。なぜなら、shake は他動詞であるが、取れる目的語の数は1つであるのに、4)においては hands と each other という2つの名詞が生じているからである。よって、この場合も、「私は彼と握手した」という表現をまず考えると次のようになる。

5) I shook hands *with* him.

よって、4)においても前置詞 with を用いて、

6) They shook hands *with* each other.

とすればよい。

このように、each other を用いる際は、日本語の「お互いに」という表現に

惑わされず、必ず他動詞または前置詞の目的語として用いないといけないのである。

### 練習問題

英訳せよ。

- 1) 彼らはお互いを軽蔑している。(look down)
- 2) 僕達は、お互いにうまくやっていきやすいと感じた。(find it easy, get along)

### 解答

- 1) They look down on each other.  
look down on + 名詞で「～を見下す、軽蔑する」。
- 2) We found it easy to get along with each other.

easy

EASY 型形容詞は、主語と目的語の関係が特殊

\*He was easy to work out the details.

「彼は親切にも手を貸してくれた」という場合、形容詞 kind を使って次のように言うことができる。

- 1) He was kind to lend me a hand.

では「彼は簡単に詳細を煮つめた」という場合、同じ構造「主語＋形容詞＋to不定詞句」を使って次のように言えるかという、こちらの方は不可である。

- 2) \*He was easy to work out the details.

これは kind と easy は全く異なる形容詞類に属しているからである。ここでは、こうした easy に類した形容詞の特徴を見ていこう。

この EASY 型形容詞は 2) のような文型は取れないが、次のような3つの文型を取ることができる。

- 3) a. 不定詞句主語型  
b. 外置構文型（仮主語型）  
c. 主語上昇型

まず不定詞句主語型は、to不定詞句が文の主語にくる構文である。

- 4) To work out the details was easy.  
(細部を煮つめるのは簡単だった。)

ここで to 不定詞句の意味上の主語を表わすために、for を用いることができる。

- 5) *For him to work out the details* was easy.

(彼が細部を煮つめるのは簡単だった。)

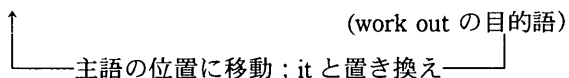
ただし、主語が重くなるため、通例は他の2つの型を用いた方がよい。

第2番目の外置構文型は、この to 不定詞句をそっくりそのまま文末に移動し、空となった主語の位置に仮主語 it を置くものである。

- 6) *It was easy (for him) to work out the details.*

第3番目の主語上昇型は注意を要する。これは6)のような外置構文型の文末にある不定詞句の中から、動詞の目的語、または前置詞の目的語を文頭の主語にまで移動させるものである。

- 7) a. *It was easy (for him) to work out the details.*



- b. *The details* were easy (for him) to work out #.

(細部は煮つめるのが簡単だった。)

注意すべきことは、the details はこの文の主語であると同時に、意味的には work out の目的語でもあるということである。work out の後に移動跡を示す出所マーク#があることにも注意せよ。

このような3つの構文を取る EASY 型形容詞には、easy のほか、次のような形容詞が含まれる。

- 8) amusing (楽しい), boring (つまらない), comfortable (快適な), dangerous (危険な), expensive (高価な), good (良い), hard (難しい), impossible (不可能な), interesting (面白い), nice (素晴らしい), pleasant (愉快的な), tough (困難な), useful (役に立つ)

たとえば、difficult を使って「ジョンは手のかかる子だ」という意味を表わすには次のように言える。

- 9) a. *To take care of John* is difficult.

- b. *It's difficult to take care of John.*

- c. *John* is difficult to take care of #.

## 練習問題

次の文を3つの文型で英訳せよ。

- 1) この川で泳ぐのは危ない。
- 2) マイケルがニューヨークでアパートを見つけるのはすこぶる難しいだろう。

## 解答

- 1) a. *To swim in this river is dangerous.*  
 b. *It's dangerous to swim in this river.*  
 c. *This river is dangerous to swim in # .*
- 2) a. *For Michael to find an apartment in New York will be very hard.*  
 b. *It'll be very hard for Michael to find an apartment in New York.*  
 c. *An apartment will be very hard for Michael to find # in New York.*

## the+比較級

The 比較級 + the 比較級では、何が比較級になるのかに注意せよ。

\*The more you study computers, the more you find them fascinating.

## ●どの部分が程度を表わすか

「勉強すればするほどコンピューターは面白くなる」というように、1つの事柄（コンピューターを勉強すること）が別の事柄（それを面白く思う）と相関して変化するような場合には、

- 1) The 比較級 + the 比較級

という構造を用いて表現する。

例えば、上記の「コンピューターを勉強する」「それを面白く思う」はそれぞれ次のように表現できる。

- 2) You study computers.
- 3) You find them fascinating.

次に、両方の文において適切な部分を比較級にして、それを文頭に出せばよい。ただし、何を比較級にして文頭に出すかは、次のような very テストを用いる。

- 4) 比較級になる部分を見分ける very テストと移動法
  - a. 比較級になるのは程度を表わす部分である。

- b. よって、強意語 *very* を入れてみると、それは必ず程度を表わす語と結び付くから、それによって程度を表わす語（句）を識別できる。
- c. 程度を表わす語が識別できたら、(*very* を取り除いた上で)それを比較級にする。
- d. *the* を冠した上で、それを文頭に移動する。
- e. ただし、比較級にした部分が次のように名詞または形容詞／副詞を修飾している場合には、それを全て文頭に移動する。

[*the* 比較級＋名詞]

[*the* 比較級＋形容詞／副詞]

### ●手順の適用

ではこれを2)~3) の文に当てはめてみよう。まず、程度を示す語句を見つけるために、*very* を入れてみよう。すると次のようになる。

5) a. \**You study computers very.*

b. *You study computers very much.*

*very* 単独ではだめだから、*much* を補って *very much* となる。すると比較級になるのは *much* だということが分かる。

6) *You study computers more.*

これに *the* を付けた上で、文頭に移動すると、次の文ができ上がる（#は *the* ＋比較級が移動する前の位置、つまり出所を示す）。

7) *The more you study computers #.*

では3)についても、同様の操作をしてみよう。まず *very* を使って、程度表現を識別する。

8) a. \**You find them fascinating very much.*

b. *You find them very fascinating.*

すると *very much* ではなく、*very fascinating* だということが分かる。つまり、ほとんどの動詞を修飾する場合には *very much* でよいが、形容詞や副詞を修飾する場合には、その前にただ *very* を置けばよいわけである。

このように、比較級になるのは *much* ではなく *fascinating* であるから、それを変化させると、次のようになる。

9) *You find them more fascinating.*

次に *the* を冠し、文頭に移動する次のようになる。ただし、4e) で見たように、*more* だけを移動するのではないので注意。

10) a. \**The more you find them # fascinating.*



b. *The more fascinating you find them #.*

最後に7)と10b)を1文にすると完成する。

11) *The more you study computers #, the more fascinating you find them #.*

ここで、決して、以下のようにならない理由を確認すること。

12) a. *\*You study computers more, you find them more fascinating.*

(比較級が文頭に移動しておらず、the も付いていない。)

b. *\*The more you study computers, the more you find them fascinating.*

(more は fascinating を修飾しているにもかかわらず、  
more だけが移動し、more fascinating が分離している。)

### ●名詞を修飾する比較級

最後に、もし3)が次のようにであると、移動させる要素は異なってくるので注意。

13) *You find them fascinating tools.*

(それは面白い道具だと思う。)

4e) に従って、比較級が名詞を修飾している場合、その名詞を含めた全体が移動しなくてはならない。よって、a ではだめで、b のようになる。

14)a. *\*The more you study computers #, the more fascinating you find them # tools.*

b. *The more you study computers #, the more fascinating tools you find them #.*

(勉強すればするほどコンピューターは面白い道具だと思う。)

### 練習問題

1. 次の文を訂正せよ。更にその意味を記せ。

1) *The more I write, the more it becomes difficult to play with my children.*

2) *The more careful you are, the less you are likely to get AIDS.*

2. 英訳せよ。

1) 知れば知るほど彼が好きになる。(get)

2) プレゼントをすればするほど、君は自分の息子を甘やかすことになる。  
(gift)

### 解答

1.1) *The more I write #, the more difficult it becomes # to play with my*

children. (執筆をすればするほど、子供と遊んでやることが難しくなる。)

2) *The more careful you are #, the less likely you are # to get AIDS.*

(注意すればするほど、エイズになる可能性は少なくなる。)

2.1) *The more I get to know him #, the more I like him #.*

2) *The more gifts you give your son #, the more you spoil him #.*

(The more you give your son # gifts...は不可。)

think / feel	
--------------	--

「どう思うか」は think の動詞型に注意して WH 移動せよ
----------------------------------

*How do you think about his marriage?
---------------------------------------

「彼の離婚についてどう思う？」という文を作る場合、次のように述べると誤りである。

1) \*How do you think about his divorce?

この誤りの原因は、日本語に引きづられて、「どう」→「どのように」→ how と短絡的に考えている点である。ところが実際は、英語の WH 疑問文を作る場合には、意味が重要なのではなく、まず WH で問う部分が「名詞か否か」が最優先されるのである。

そこで、まず、平叙文を使って think の関連する文型を確認してみよう。

2) I think (that) he will regret his divorce.

(あいつは離婚したことを後悔すると思う。)

3) I cannot think why their marriage ended in divorce.

(どうして2人の結婚が離婚に終わってしまったのか理解できない。)

4) \*I think happy about it.

(それを嬉しく思う。)

すると2)~3)からわかるように、think は文を目的語とすることがわかる。目的語になっているということは、こうした下線部の文が名詞の働きをしているということになる。それに対して、4)でわかるように、think は形容詞が直後に続くことはない。

これを総合すると、think の次に来る部分を問うには、必ず名詞的な WH 疑問詞が必要であり、非名詞的な WH 語では不適切になる。

5) □ You think [名詞] about his divorce.

↑                      ↓  
what

(\*how)

つまり、名詞的な what ならば OK で、非名詞的な how は不可となる。

6) What        } do you think # about his divorce?  
    \*How        }

では、4)のように、後ろに形容詞が来れる動詞はないかというと、feel が存在する。

7) You feel *awful* about his divorce.

(彼の結婚についてはひどく残念だと考えるわけだね。)

すると、その部分を WH 化すると、非名詞的 how になる。

8) How        } do you feel # about his divorce?  
    \*What        }

では、feel を使って他人の考えを聞く場合、how だけしか使えないかというと、そんなことはない。次のような動詞型があるからである。

9) I feel (that) he's going to enjoy it.

(それを楽しむと思うよ。)

ここでは、下線部の文は名詞の働き（目的語）をしている。よって、この文を基にして WH 疑問文を作ると、当然 what を用いることになる。

10) *What* do you feel # about his divorce?

まとめると、think と feel はその動詞型によって、次のような WH 疑問文になる。

11) think + 名詞／文 → What do you think # (about it)?

12) feel + 形容詞 → How do you feel # (about it)?

名詞／文 → What do you feel # (about it)?

注意すべき点は、こうした疑問文のどれを使っても、「どう思いますか／感じますか」というふうに、日本語では疑問詞の部分は同一になる。だからと言って同一の WH 疑問詞が使われるわけではなく、あくまで英語の動詞型によって、その選択が決まってくるのである。

## 練習問題

1. 以下の文を英訳せよ。

1) その国の権力闘争についてどう考えますか。(struggle)

2) ジェニーがハイヒールを履くのはどう思う？

2. 次の文では動詞が think であるのに how が疑問詞になっているのはなぜか。how の出所を指摘しながらその理由を述べよ。

How do you think he is going to get there?

## 解答

1.1) What do you think # } about the power struggle in that country?  
 How do you feel # }  
 What do you feel # }

What do you think # of the power struggle in that country?

2) What do you think # } about Jenny's wearing high heels?  
 How do you feel # }  
 What do you feel # }

What do you think # of Jenny's wearing high heels?

2. 示された文の出所は以下のとおりである。

How do you think he is going to get there # ?

つまり、この場合は think の目的語全体が how になっているのではなく、どうやってそこに着いたかという手段の部分（例えば by bus など）が how になっているのである。よって、この場合はたとえ think であろうとも how でいいわけである。

## to 不定詞

「名詞句 to 動詞句」型の構造と意味：名詞を修飾する to 不定詞には3つの型がある

He has nobody to take care of #.

英語には次のような to 不定詞を用いた構造が数多く見られる。

1) [名詞句 to 動詞句]

この構造には、次の3つの型があるので、アウトプットの際にもインプットの際にも、それがどの型であるのか注意する必要がある。

- 2)a. 名詞句と動詞句が「目的語・動詞句」関係になっているもの
- b. 名詞句と動詞句とが「主語・述語」関係になっているもの
- c. 名詞句と動詞句とが「主部・補部」関係になっているもの；つまり、名詞句が、その補部として to 不定詞を選択できるような特性をあらかじめ持っている場合

では、それぞれの場合の具体例を見ていこう。まず 2a) には次のような例がある。

### 3) 「目的語・動詞句」型

- a. something to drink #  
(飲水← drink something)
- b. a lot of things to see #  
(多くの見るべき物← see a lot of things)
- c. a house to live in #  
(住む家← live in a house)
- d. children to take care of #  
(面倒を見てやらないといけない子供← take care of children)

ここで注意すべき点は、意味の上から言うと、to の前の名詞句が、動詞句内の他動詞または前置詞の目的語になっている点である (a・b では動詞の目的語、c・d では前置詞の目的語)。言い換えると、この型では to 不定詞句内の動詞または前置詞の目的語の位置が 1 か所必ずブランクになっているわけである。

2b) には次のような例がある。

### 4) 「主語・述語」型

- a. the first to come here  
(最初にここに来る／来た人 (または物) ← The first (person/thing) comes here.)
- b. the woman to take care of the children  
(子供の面倒を見てくれる人← The woman takes care of the children.)

この場合には「主語・述語動詞」関係であるから、to 不定詞句の中にブランクはない。

次に 2c) については、「動詞 + to 不定詞」「形容詞 + to 不定詞」がそのまま「派生名詞 + to 不定詞」に平行移動されたものや、派生名詞ではないが、to

不定詞を補部にできるような特性を持っている名詞の場合が含まれる。

5) 「主部・補部」関係

a. his decision to fire her

(彼女をクビにする決心← He decided to fire her. 動詞からの派生名詞)

b. a wish to be rich

(金持ちになりたいという望み← He wishes to be rich. 動詞と同形の名詞)

c. the ability to do the work

(その仕事をできる能力← He is able to do the work. 形容詞からの派生名詞)

d. curiosity to know why this movie is popular

(どうしてこの映画に人気があるのかを知りたいと思うこと← He is curious to know why this movie is popular. 形容詞からの派生名詞)

e. time to read everything

(全てを読む時間; to 不定詞を取れる名詞)

f. the race to build faster supercomputers

(処理のより早いスーパーコンピュータを作る競争; to 不定詞を取れる名詞)

このように、あらかじめ to 不定詞を取ることが出来る特性を持つ名詞の場合(「主部・補部」型)を除けば、名詞と to 不定詞の結合関係は「目的語・動詞句」「主語・述語」関係のいずれかであるから、注意する必要がある。

**練習問題**

1. 「名詞句 to 動詞句」の形を用いて次の文を英訳せよ。更に、各文は 1. 「目的語・動詞句」 2. 「主語・述語」 3. 「主部・補部」関係のいずれであるかも指摘せよ。

1) 私を愛してくれる人はいない。

2) 私には愛すべき人がいない。

3) 彼はそんなことをする人じゃない。

4) ビルは彼女に渡すプレゼントをなくしてしまった。(give)

5) 君にはこの提案を拒否する権利はない。

2. 各文における下線の「名詞句 to 動詞句」は、1. 「目的語・動詞句」 2. 「主

語・述語」3.「主部・補部」関係のいずれであるかも指摘せよ。更に文全体の意味を述べよ。

- 1) The rich old man had no one to leave his money to and died childless.
- 2) I've got an announcement to make.
- 3) 'Initiative' means the power to begin something.
- 4) We'd like to give you little something to remember us by.
- 5) They're looking for someone to pick up their child every day.

**解答**

1.1) a. I have no one to love me.

b. There is nobody to love me.

いずれも 2。(← No one loves me.)

2)a. I have no one to love # .

b. There is nobody (for me) to love # .

いずれも 1。(← love no one)

3) He is not a person to do such a thing. 2。(← That person does such a thing.)

4) Bill lost a gift { to give her #.  
to give # to her.

1。(← give her a gift/ give a gift to her)

5) You've got no right to refuse this proposal. 3.

2.1) 1。(← leave his money to no one) 「その裕福な老人にはお金を残す跡継ぎがおらず、子供がいないままなくなった。」

2) 1。(← make an announcement) 「発表したいことがあるんだ。」

3) 3。「イニシアティブ」とは何かを始める力を意味する。」

4) 1。(← remember us by little something) 「私達のことを思い出せるちょっとしたものをさしあげます。」something に形容詞が付く場合、通例それは後置される。cf. something bright (明るいもの)。しかし、little をつけて「ちょっとしたもの／贈物」と言う場合については、例外的に little something と前置する。

5) 2。(← Someone picks up their child every day.) 「連中は毎日クルマで子供を迎えに行ってくれる人を探している。」

WH 疑問文
--------

WH疑問文では、聞きたい部分が名詞か否かに注意せよ
---------------------------

*What city do you live?
-------------------------

### ● YES/NO 疑問文と WH 疑問文

英語の疑問文には、YES/NO で答えられる YES/NO 疑問文と、そうした二者択一ではなく、特定の情報を引き出す WH 疑問文とがある。

1) Do you want a doggie bag? (YES/NO 疑問文)

(折り [持ち帰り用袋] は必要ですか?)

2) Who did you shake hands with? (WH 疑問文)

(誰と握手したんだい?)

さて、後者の WH 疑問文であるが、これは文頭が WH のつく語(who(m), whose, what, which, why, when, where; および便宜上 how も含める)で始まる。これらは疑問詞と呼ばれるが、この疑問詞はただ単に WH 疑問文であることを表示しているだけではなく、その文のなかのある要素が形を変えて文頭に移動したもののなのである。

例えば、次のような場所を問う WH 疑問文を考えてみよう。

3)a. *Where* did you put my sub?

(どこに僕のサブ (=サブマリン型サンドイッチ) を置いたんだ?)

b. *What* did you put my sub on?

(僕のサブを何の上に置いたんだ?)

c. *Which table* did you put my sub on?

(どの机の上に僕のサブを置いたんだ?)

注意すべきことは、同じ場所を聞くにしても、where, what, which (table) という異なる疑問詞が用いられており、更に b・c の文末には on が残っているという点である。

この点を解明するために、この文の基になる平叙文を考えてみよう。

4) You put my sub on this table.

すると、ここで on this table 全体を問うと where になり、this table の部分だけを問うと what や which table になっているのがわかる。

### ● 名詞的疑問詞・非名詞的疑問詞

このように、WH 疑問詞はそれぞれの意味が異なると共に、その文法的役割



も異なっているのである。つまり、疑問詞の中には名詞の役割をするものと、非名詞的役割を果たすものがある。よって、問う部分がどちらであるかによって、まず使用する疑問詞が異なってくるわけであり、意味の違いはその後で考慮されることになる。

ここで、名詞的か非名詞的かによって、WH 語を分類すると、次のようになる。

5)a. 名詞的疑問詞 : who(m), whose, which, what  
(名詞の働きをするので疑問代名詞と呼ばれる)

b. 非名詞的疑問詞 : why, when, where, how  
(動詞句を修飾するので疑問副詞と呼ばれる)

更に、後ろに別の要素が付く場合にも、それ全体が名詞なのかそうでないのかに分かれる。

6)a. 名詞的疑問詞句 : which + 名詞, what + 名詞, whose + 名詞, how many/much + 名詞  
(which/what/whose は後続の名詞を修飾しているので、それ自体は疑問形容詞と呼ばれる ; how は形容詞 many/much を修飾しているので、それ自体は疑問副詞と呼ばれる)

b. 非名詞的疑問詞句 : how + 形容詞 / 副詞  
(how は形容詞・副詞を修飾しているのでそれ自体は疑問副詞と呼ばれる)

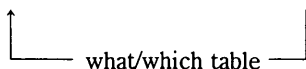
すると、例文 4)において、on this table 全体を疑問詞化するとすれば、なぜ where になるのか分かる。それが名詞ではないからである。そして、その上で、それは場所を表わしているから非名詞的疑問詞のうちから where が選択されることになる。

this table だけを wh 化すると、今度はこれは名詞であるから、what, which, what table, which table などを選択できる。もちろん、人ではないから who は不可となる。

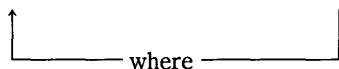
### ●出所と WH 移動

疑問詞には、名詞の部分我问うものと、そうでないものがあるのがわかったと思う。ただし、WH 疑問文というのは、ただ聞きたい部分を WH 語にすればいいだけではない。それは必ず文頭に移動する。

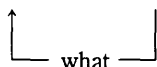
7)□ You put my sub on this table.



8) □ You put my sub on this table.



9) □ You put my sub on this table.



このように、聞きたい部分を WH 疑問詞にして文頭に移動し、そしてあとは疑問文の語順にすると、次のようになる。

10) *What* } did you put my sub on # ?

*Which table* }

11) *Where* did you put my sub # ?

12) *What* did you put # on this table?

(このテーブルに何を置いたの?)

以上のように、聞きたい部分が名詞であるかどうかによって適切な WH 語にした上で、それを文頭に移動することを WH 移動 (WH Movement) と呼ぶ。そして名詞であるか否かにかかわらず、移動した要素が元あった場所をその WH 語の出所 (デッド・ジョ) と呼んでおこう。10)-12) では # で示した部分が出所にあたる。

### ●名詞的 WH 語の出所は、名詞の生じる位置

すると、当然、名詞の働きをする疑問詞の出所は、名詞が生じられる位置になくてはならない。次の文がなぜおかしいかというと、疑問詞の部分が *what city* という名詞であるにもかかわらず、その出所の位置は名詞が生じる位置ではないからである。

13) \**What city* do you live # ?

名詞の生じる基本的位置は

1. 文の主語
2. 動詞の目的語
3. 前置詞の目的語
4. 動詞の補語

の4つである。13) では *live* は自動詞で、\**live this city* とは言えず、*live in this city* なのであるから、疑問文においても、次のように *in* を入れてやれば正しくなる。

14) *What city* do you live in # ?

(何ていう町に住んでるの?)

### ●主語の WH 移動

上記では、他動詞や前置詞の目的語になっている名詞を WH 化する方法を見たが、もちろん、主語を WH 移動することもできる。ただし、注意すべき点がある。1 つは、主語の要素を WH 移動しても、語順の変動が生じない点である。

15)a. *Who* put my sub on this table?

b. \**Who* did put my sub on this table?

c. \**Did who* put my sub on this table?

(誰が僕のサブをこの机に置いたんだ?)

2 つめは、主語も WH 移動するが、もともと先頭にあったので一見動いていないように見えるが、実際には元の主語の位置が空、すなわち出所になっているという点である。

16)a. *Who* # put my sub on this table?

b. *What* # has gotten into her?

(あいつはどうなってしまったんだ? ←あいつに何が入ったのか)

c. *What size* # is good for you?

(どのサイズが合いますか?)

このように、主語であれ何であれ、WH 疑問文では必ずその疑問詞の出所が存在するということになる。

### 練習問題

1. 名詞がどうか注意到しながら、下線部を問う WH 疑問文を作り、その疑問文の意味も述べよ。

1) He graduated from Carbondale High School.

2) Your hobbies are swimming and listening to heavy metal.

3) He had a fight with his wife for that reason.

4) She shook hands with the President.

2. 次の WH 疑問文において、下線の疑問詞の出所を # で示し、更にその文の意味を記せ。

1) What do you mean by that?

2) Who didn't have a crush on him?

- 3) Where did you find that nice-looking pullover?
- 4) Who do you want to kiss you?
- 5) How many people did you make friends with in the US?

解答

- 1.1) *What* } did he graduate from # ?  
       *What (high) school* }  
       *Which (high) school* }

(かれは何[どの高校、どちらの高校]を卒業したんですか?)

- 2) *What* are your hobbies # ? (趣味は何なの?)
- 3) *Why* did he have a fight with his wife # ?

(どうして彼は夫婦喧嘩をしたの?)

for that reason の that reason の部分だけを問えば、*What (reason) did he have a fight with his wife for # ?* となる。

- 4) *Who* # shook hands with the President?  
 (誰が大統領と握手をしたのか?)

- 2.1) *What* do you mean # by that?  
 (それはどういう意味か?)

これを怒った調子で言えば「それはいったい全体どういうことだ」「失礼なことを言うな」の意味にもなる。what は動詞 mean の目的語。

- 2) *Who* # didn't have a crush on him?  
 (だれが彼にイカレなかったの?)

文脈によっては「彼に惚れなかった人なんている? いないわ」という反語的意味にもなる。who は文の主語。

- 3) *Where* did you find that nice-looking pullover # ?  
 (そのいかすセーターはどこで見つけたの?)

where は in that shop その他の非名詞的部分を WH 移動したもの。

- 4) *Who* do you want # to kiss you?  
 (誰にキスしてほしいの?)

who は動詞 want の目的語。

- 5) *How many people* did you make friends with # in the US?  
 (アメリカでは何人の人と友達になったの?)

how many people は前置詞 with の目的語。

what (1)
----------

what は先行詞を含んだ関係代名詞
--------------------

*Friendship is something what he found in the US.
---------------------------------------------------

関係代名詞を含む関係節は、必ず先行詞を必要とする（＃は出所を示す）。

1)a. the thing (*which*) he found # in his car

（クルマの中で彼が見つけた物）

b. a man *who* # paid a million dollars for that little book

（あのちっちゃな本に100万ドル払った人）

それぞれ the thing, a man が先行詞であり、残りの部分が関係節である。よって、関係節は名詞を修飾する修飾語句の1種であり、関係節だけでは形容詞句のようなものである。だから、関係節は単独では名詞の働きができない。

2)a. The thing (*which*) he found in his car can be a clue to this case.

b. \*Which he found in his car can be a clue to this case.

（クルマの中で彼が見つけたものは、この事件の鍵になるかもしれない。）

aでは関係節の先行詞があるのに対し、bでは先行詞が存在しないから、関係節だけでは文の主語にはなれない。よって、bは不適格になっている。

ところが、関係代名詞の中で、先行詞を必要としないものがある。それが *what* である。以下の文を比べてみよう。

3)a. what he found # in his car

b. \*which he found # in his car

c. the thing which he found # in his car

*which* は *who(m)/that* と同様、必ず先行詞を必要とするが、*what* は必要としない。換言すると、*what* は、先行詞を自分自身のなかに含んでいると言ってもよい。よって、*what* は次のようなパラフレーズが可能になる。

4) what = the thing(s) which / something that / those which / etc.

よって、たとえば「友情こそが彼がアメリカで見つけたものだ」と言いたければ、5a) でなくてはならず、5b) は不可である。

5)a. Friendship is *what* he found # in the US.

b. \*Friendship is something *what* he found # in the US.

なぜなら 5b) では *what* を使っている上に、更に先行詞 *something* があるか

らである。

なお、関係代名詞 *what* は 4) のようにパラフレーズできることからわかるように、次のような特徴を持っている。

6)a. 人ではなく物を指す。

b. 単数にも複数にもなる。(よってどちらに扱うかは文脈による)

c. 主格または目的格になる。

たとえば、7a) は *what* を単数名詞として用い、7b) では複数名詞として用いている。

7)a. Be careful about *what # is written on the board*.

(掲示板に書いてあることに注意しなさい。)

b. *What # were left there* amazed all the guests.

(残っているものを見て、お客はみんな驚いた。)

a では述語動詞が *is*、b では *were* になっていることから、場合場合によって、*what* は単数にも複数にも扱われることがわかる。

また、以下の文は、*what* が主格または目的格で使えることを示している。

8)a. *What # must be done today* must be done today.

(今日しなくちゃいけないことは、今日やらなくちゃいけない； *what* は主格)

b. Do *what you must do #* today.

(今日しなくちゃいけないことをやりなさい； *what* は目的格)

このように *what* は先行詞を必要としない関係代名詞であり、意味内容を考える際には 4) で示したように、*the thing(s) which* とパラフレーズして考えてみるといいだろう。

最後に、関係詞代名詞の中では *what* は特殊な存在であったが、疑問詞の中ではそうではない。この点を誤解しないようにする必要がある。

#### 9) 疑問詞

a. What do you like to do # first?

(何を最初にしたい？)

b. Which do you like to do # first?

(どれを最初にしたい？)

c. Who do you like to meet # first?

(最初に会いたいのは誰？)

## 10)関係代名詞

a. What he found # in the US is friendship.

b.\*Which he found # in the US is friendship.

(彼がアメリカで見つけたのは友情だ。)

c.\*Who he met # was the President of the United States.

(彼が会った人はアメリカ大統領だ。)

このように、関係代名詞の場合だけ、what は他の関係詞と異なり、先行詞を必要としないわけである。

## 練習問題

what を用いて次の文を英訳せよ。更にその what が主格なのか目的格なのかを述べよ。

1)彼がアメリカから持ち帰ったのはこの辞書だけだ。

2)首相が重要だと考えていることをノートした。(the Prime Minister, write down)

3)みんなに知られているものには興味がない。

## 解答

1)a. What he brought # back from the US is just this dictionary.

(目的格)

b. What he came back with # from the US is just this dictionary.

(目的格)

2)a. I wrote down what the Prime Minister considered # important.

(目的格)

b. I wrote down what the Prime Minister thought # was crucial. (主格)

3)a. I'm not interested in what # is known by everyone. (主格)

b. I have no interest in what anyone knows #. (目的格)

what (2)

語順変換方式による what 簡易派生法：名詞を what に変えて左方移動せよ  
he found something in the US → what he found # in the US

「彼がアメリカで見つけたもの」と表現する場合、1a) のような2つの部分を合成して、b) のように which/that を使った関係節を派生することができる。

これを更に関係代名詞 *what* を用いて表現すると、c のようになる。

- 1)a. something + he found it in the US
- b. something which/that he found # in the US  
(which/that は省略可)
- c. what he found # in the US

さて、この場合の c を次の文と比較してみよう。

- 2) He found something in the US.

注意すべき点は、1c) は全体としては名詞句であり、「彼がアメリカで見つけたもの」という意味である。その点、2) はあくまで文であり、「彼はアメリカで何かを見つけた」という意味になる。このように両者は、名詞句と文というように範疇が異なるし、意味も当然異なっている。

ただし、1c) と 2) を比較して注意すべき点がある。まず形だけを見ると、両者では用いている語句が *what/something* を除けば同一であるということと、あとは *what* が本来の目的語の位置ではなく、文頭にあるということである。

これは何を語っているかという点、

- 3) ある英文中に something/the thing/these (things) などの漠然とした意味内容を持つ名詞・代名詞がある場合、それを修飾する関係節を作りたいければ、その名詞を *what* に変えて左側に移動すればよい。

ということになる。これを「語順変換方式による関係代名詞 *what* 簡易派生法」と呼んでおこう。

すると、2) のような文があり、これを *something* を修飾する関係節に変えたければ、*something* を *what* に変えたうえで、それを文頭に移動すればよい。

- 4)a. □ He found *something* in the US.



- b. *what* he found # in the US  
(彼がアメリカで見つけたもの)

では次の文において *something* を被修飾語にしたい場合はどうか。

- 5) Something is bothering you.

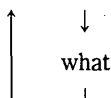
(何かがあなたを悩ませている→何か心配事があるね。)

3) の語順変換方式によると、被修飾語 *something* を *what* に変えて左に移動す



るだけだから、次のようになる。

6)a.□ Something is bothering you.



b. *what* # is bothering you

(あなたを悩ましていること)

これだけでよい。ただし、関係代名詞 *which/that* を使った場合は、それが主格であれば省略できなかった点に注意すること。

7)a.\*something (省略) is bothering you

b. something *which/that* is bothering you

以上のように、something/the thing(s)といった、意味内容に乏しい名詞句を先行詞にした関係節を作る場合、それを関係詞 *what* の置き換えて文頭に移動すると、それだけで「～するもの・こと」という関係節ができあがるのである。

### 練習問題

語順変換方式によって、文を作った上で、*what* を用いて次の関係節を派生せよ。

- 1)彼が考えていること
- 2)今日発売されるもの (come out)
- 3)あの教授が木曜にすること
- 4)彼がやめようと決心したこと (decide, quit)
- 5)私が70%に縮小したもの (reduce to 70%)

### 解答

- 1) He is thinking about something. → *what* he is thinking about #
- 2) Something is coming out today. → *what* # is coming out today
- 3) That professor is going to do something. → *what* that professor is going to do #
- 4) He (has) decided to quit something. → *what* he (has) decided to quit #
- 5) I (have) reduced something to 70%. → *what* I (have) reduced # to 70%

## 関係詞

関係代名詞節を作るステップ：文を名詞に後続させただけでは不可

\*the shirt I paid \$30 for it

## ●関係詞は接着剤

文が名詞を修飾する際、その接着剤として用いるのが関係代名詞である。例えば、先行詞である名詞の右側に、ただ文を置いただけでは修飾関係は成立しない。たまたまバスで隣同士になった男と女のようなものである。この点が日本語と大きく違う点で、たとえば日本語では

1)a. 昨日、30ドル払った。

b. 昨日、30ドル払ったシャツ

と言っても、なんらおかしくない。ところが、英語ではそうはいかない。

2)a. I paid \$30 yesterday.

b. \*the I paid \$30 yesterday shirt.

c. \*the shirt I paid \$30 yesterday

bでは、関係節が被修飾語 shirt の左側に来ているので、不可である。しかし、cのように、右側に持ってきて、やはりこのままでは不適格である。つまり、修飾する文を、被修飾語の隣に置いただけでは、その文は名詞を修飾しないのである。このように、名詞と文を結びつける接着剤の役割を果たすのが関係詞である。

この関係節は、他から借りてきた単なる接着剤ではない。名詞を修飾する文の一部が、関係節に変化するのである。このプロセスは WH 疑問文とほぼ同一である。よって、変化する部分が「名詞であるかどうか」がやはり重要となり、名詞であるならば、関係代名詞に変化することになり、「非名詞的」な前置詞句や副詞の部分を変化させると、関係副詞になる。

## ●関係代名詞5つのステップ

では、この接着剤の働きをする関係詞を用いて、ある名詞とそれを修飾する文とを接続する方法を見ていこう。それには、次の5つのステップが必要である。

## 3)関係（代名詞）節をつくる5つのステップ

- 1.修飾される名詞（被修飾語＝先行詞）と同じ物・人を指す名詞を、修飾する文（＝関係節になる文）の中から捜せ。同一指示の名詞がなければ、

修飾する文の中に組み入れよ。

2. その名詞が文中で次のどの働きをしているかを確認せよ。

- a. 主語（例：My wife is not feeling well. うちのかみさんはちょっと調子が悪い。）
- b. 動詞の目的語（例：I'll walk you home. 送っていくよ。）
- c. 前置詞の目的語（例：He sent the paper to a wrong company. 書類を違う会社に送ってしまった。）
- d. 動詞の補語（例：I don't want to be a man like him. 彼のような男にはなりたくない。）
- e. (別の名詞の所有等を表わす) 前置修飾語（例：This company's want ad is really great. この会社の求人広告はとってもいい。）

3. 上で見た機能と、その名詞が人か物かを考慮に入れた上で、この名詞を次の表に従って適切な関係代名詞に変化させよ。

名詞の特性 関係節での働き	人	物
主語 (主格)	who, that	which, that
動詞の目的語 (目的格)	(who, whom, that)	(which, that)
前置詞の目的語 / (目的格)	(who, whom, that)	(which, that)
動詞の補語 (目的格、主格)	(which, that)	(which, that)
名詞の前置修飾語 (所有格)	whose	whose

\* ( ) 内の関係代名詞は一定の条件で省略できることを示す

4. 関係代名詞を、その文の受皿の位置 (= 文頭) に WH 移動し、元の場所には出所#を残せ。

5. でき上がった関係節を先行詞の直後に置け。

このステップを踏めば、自動的に関係代名詞を適切に使いこなせることになる。

#### ●ステップの適用

では、これを実際 の 用例を見ながら確認してみよう。例えば、「(私が) 30ドル払ったシャツ」という表現を考えてみよう。すると修飾されるのが「シャツ」、

修飾する部分、つまり関係節になるのが「30ドル払った」という部分であることがわかる。

4) the shirt + I paid \$30

ところが、ステップ1.で見たように、これでは I paid \$30 の部分には先行詞と同じものを指す名詞が存在しない。これでは先行詞と共通項がないから、関係詞が生じることができない。ではどうすればよいか。強制的に共通項を作り出せばよい。「シャツ」と「30ドルを払う」という表現の関係を考えると、「そのシャツに対して30ドル払う」ということだから、

5) the shirt + I paid \$30 for the shirt / it

と考えればいいわけである。これで共通項ができた。

次のステップ2は、共通項の部分、つまり、the shirt/it が関係節でどういう働きをしているかを見るわけである。すると、これはcの前置詞の目的語であることが分かる。

ステップ3では、前置詞の目的語になっている「物」はどういう関係代名詞になるかを見ればいいわけである。すると、the shirt は「物」であって前置詞の目的語であるから、which, that (およびその省略) の選択ができることがわかる。例えば、which を選択すると、

6) the shirt + I paid \$30 for which

となる。

ステップ4では、この which を文頭に WH 移動して、元の位置に出所を残せばよい。

7) the shirt + which I paid \$30 for #

最後のステップ5では、これをそのまま先行詞につなげればいいわけだから

8) the shirt which I paid \$30 for #

ができる。

また、ステップ3.で見たように、which の代わりにはthatが使える、更に、それを省略することもできるから、8)は次のようにも言える (( )は関係詞の省略を示す)。

9) the shirt (that) I paid \$30 for #

これで「30ドル払ったシャツ」という表現が完成した。これは名詞に修飾語が付いたもので、全体としてはあくまで名詞だから、この上に「30ドル払ったシャツは自分には似合わなかった」と言いたければ、

10) The shirt (that) I paid \$30 for # didn't suit me.

のように、これを文の主語に据えればよい。

「彼女は僕が30ドル払ったシャツを気に入ってくれなかった」ならば

11) She didn't like the shirt (that) I paid \$30 for #

とすればよい。

### 練習問題

関係代名詞を用いて、次の名詞句を表現せよ。また出所も示せ。

- 1) ボスが強化しようとしている販売員 (the sales staff, beef up)
- 2) 彼がデートしている女の子 (go out, on a regular basis)
- 3) 雨で中止になった試合 (rain out)
- 4) 私が繰り返す誤り (keep, mistakes)
- 5) 彼がやってる計画 (up to)

### 解答

1.1) the sales staff (who/that) the boss is going to beef up

2) the girl (who/that/whom) he goes out with # on a regular basis  
go out は自動詞だから、前置詞 with が必要。

3) the game which # was rained out

4) the mistakes (that/which) I keep making

5) the plan (that/which) he is up to

### 関係詞(2)

語順変換方式による関係代名詞節簡易派生法：被修飾語を左方移動せよ  
I paid \$30 for the shirt. → the shirt I paid \$30 for #

「30ドル払ったシャツ」と表現する場合、1a) のような2つの部分を合成して、b) の関係節を派生できる (cf. 「関係詞 (1)」)。

1)a. the shirt + I paid \$30 for it.

b. the shirt which I paid \$30 for #

この場合、関係代名詞は目的格であるから、次のように省略可能である。

2) the shirt I paid \$30 for

さて、これを次の文と比較してみよう。

3) I paid \$30 for the shirt.

注意すべき点は、2)は全体としては名詞句であり、「30ドル払ったシャツ」

という意味である。3)はあくまで文であり、「私はそのシャツに30ドル払った」という意味になる。このように両者は、名詞句と文というように範疇が異なるし、意味も当然異なってくる。

ところが、それにもかかわらず、2)と3)は全く同じ点がある。それは両者で用いられている語句が全く同一であり、語順だけが異なるという点だ。

これは何を語っているかという点、

- 4)ある英文があり、その中の1つの名詞を修飾する関係節を作る場合には、その名詞を左側に移動すればよい

ということになる。これを「語順変換方式による関係(代名詞)節簡易派生法」と呼んでおこう。

すると、3)のような文があり、被修飾語(=先行詞)として the shirt を選択すると、それを文頭に移動すればそれだけで 5b) のような名詞句ができあがる。

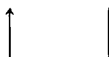
- 5)a. ☐ I paid \$30 for the shirt



- b. the shirt I paid \$30 for #  
(30ドル払ったシャツ)

あるいは、\$30 を被修飾語(=先行詞)にしたいなら、それを文頭に移動すればよい。

- 6)a. ☐ I paid \$30 for the shirt



- b. \$30 I paid # for the shirt  
(そのシャツに払った30ドル)

では次の文において the man を被修飾語にしたい場合はどうか。

- 7) The man paid \$30 for the shirt.

4)の語順変換方式によると、被修飾語を左に移動するだけだから、次のようになる。

- 8)a. ☐ The man paid \$30 for the shirt.



- b. the man # paid \$30 for the shirt

ところが、これでは文である 7)と語順までも同一になるため、文と名詞句の区別ができない。よって、この場合は必ず関係代名詞 who/that を入れておかなければならない。

9) the man [ who  
that ] paid \$30 for the shirt

(そのシャツに30ドル払った人)

「関係詞 (1)」において、関係代名詞の目的格は省略できるのに対し、主格は省略できないことを見た。その理由はここにあったのである。つまり、主格の関係代名詞を省略すると、その部分が文と見分けがつかなくなるからである。

よって、ここで 4)の簡易派生法を次のように補足しておこう。

10)ある英文があり、その中の 1つの名詞を修飾する関係節を作る場合には、その名詞を左側に移動すればよい。ただし、主語を移動する場合には、その後に関係詞(主格)を必ず入れなくてはならない。

なお、こうした点は、日本語においても全く同一であることを見ておこう。

11)a.その女性は30ドルをそのシャツに払った。(文)

b.その女性が30ドルを # 払ったシャツ (名詞句)



c.その女性が # そのシャツに払った30ドル (名詞句)



d.# 30ドルをそのシャツに払った女性 (名詞句)



このように、左方移動と右方移動の違いはあるが、実は日本語でも被修飾語になる名詞を右方に移動すれば、それで関係節に修飾される名詞句ができあがるのである。

### 練習問題

語順変換方式によって、文を作った上で、次の関係節を派生せよ。

- 1)彼が考えている未来
- 2)今日発売される最新号 (come out, issue)
- 3)あの教授がする木曜のテスト (give)

4)彼がやめようと決心した仕事 (decide, quit)

5)私が70%に縮小したページ (reduce to 70%)

### 解答

1) He is thinking about the future. → the future he is thinking about #

2) The latest issue is coming out today. → the latest issue # which/that is coming out today

which/that は主格であるから、省略不可。come out は自動詞。

3) That professor is going to give the test. → the test that professor is going to give #

4) He (has) decided to quit the job. → the job he (has) decided to quit #

5) I (have) reduced the page to 70%. → the page I (have) reduced # to 70%

### 関係詞(3)

関係節を避けた方がいい場合もある

A boy who was ten years old was arrested for drunk driving.

### ●関係節を用いない場合

関係詞とは、文がある名詞を修飾する際に用いられるすこぶる便利なものなのだが、多用することが常にいいとは限らない。つまり、それ以外の構造を用いたほうが自然であったり、簡潔になったりする場合がある。以下では、関係節（関係詞を用いた修飾文）以外の表現形式を用いた方が、文章表現上すっきりすると思われる例を挙げてみよう。

### ●[1] 関係節が形容詞（句）で表現できる場合

次の文を比較してみよう。

1)a. Jackson outlined the events *that were incredible*.

b. Jackson outlined the *incredible* events.

(ジャクソンはその信じられないような事件の概要を説明した。)

ここで観察できることは、aでは関係節 *that were incredible* を用いているのに対し、同じ内容をbのように、単に形容詞 *incredible* を被修飾語の前に置いて表わすことができるという点である。そうすると、当然不必要な関係節を使わないbの方が簡潔でよい。次の文でも同様。

2)a. A boy *who was ten years old* was arrested for drunk driving.

b. A *ten-year-old* boy was arrested for drunk driving.



(10才の少年が飲酒運転で逮捕された。)

who was ten years old と ten-year-old (year が単数形である点に注意) を比べれば、ここでも後者の方が簡潔で、わざわざ関係節にする必然性がない。

このように、関係節が簡単な形容詞(句)に還元できる場合には、後者を用いたほうが簡潔に要領よく表現できる場合が多い。

● [2] 関係節が前置詞句で表現できる場合

次の文を比較してみよう。

3)a. I'm donating every penny to the Diabetes Center *which is in Boston*.

b. I'm donating every penny to the Diabetes Center *in Boston*.

(金は全てボストンにある糖尿病センターに寄付している。)

ここでも *which is in Boston* という関係節を用いなくても、*in Boston* という前置詞句で十分な意味内容が伝達できる。次の例も同様。

4)a. My father never trusted any vehicle *that had less than four wheels*.

b. My father never trusted any vehicle *with less than four wheels*.

(父はタイヤが4つより少ない乗物は決して信用しなかった。)

このように、関係節が簡単な前置詞句で表現できる場合もある。この場合は形容詞で表現する場合同様、動詞の部分が完全になくなってしまふわけだから、それが *which is* のようにほとんど実質的な意味をも持たないようなものならば、積極的にそれを節約するほうがいいわけである。

● [3] 関係節が過去分詞句／現在分詞句で表現できる場合

3番目に、関係節が過去分詞句や現在分詞句を使って簡潔に表現できる例を見ておこう。

5)a. The Italian boy *who was named Lee* didn't get mad; he tried to get even.

b. The Italian boy *named Lee* didn't get mad; he tried to get even.

(リーという名のそのイタリア少年は、腹を立てる代わりに仕返しすることを考えた。)

ここでは *who was named Lee* を *named Lee* にすることにより簡潔さを達成している。以下も同様。

6)a. I had a weekend job in a coffee shop *which was run by a Greek*.

b. I had a weekend job in a coffee shop *run by a Greek*.

(週末にはギリシャ人が経営するコーヒーショップでアルバイトをしていた。)

次に、現在分詞句を用いて関係節を簡潔にした例を挙げておく。

7)a. He was an aggressive man *who talked fast*.

b. He was an aggressive *fast-talking man*.

(彼は攻撃的で、早口の男だった。)

8)a. That's not a plane *which flies nonstop to Chicago*.

b. That's not a plane *flying nonstop to Chicago*.

(あれはシカゴまでノンストップで飛ぶ飛行機じゃないよ。)

9)a. They missed the notice *which showed* when the game would start.

b. They missed a notice *showing* when the game would start.

(連中は、いつゲームが始まるかを書いてある掲示を見落とした。)

● [4] 関係節が「to + 動詞句」で表現できる場合

英語には「名詞句 to 動詞句 (不定形)」という構造があり、これを用いて関係節を簡略化することができる (cf. 「to 不定詞」)。

10)a. He wanted to be *the first who # would drive the new car*.

b. He wanted to be *the first to drive the new car*.

(彼はその新車を最初に運転したいと思った。)

11)a. I've got an announcement (*which*) *I would like to make #*.

b. I've got an announcement *to make #*.

(連絡したいことがある。)

ここで注意すべきことは、10b)では the first と drive the new car の関係が the first (man) would drive the car の関係、つまり、主語・述語関係になっていることである。それに対し、11b)では an announcement と make の関係は make an announcement の関係、つまり、目的語・動詞関係になっている。

以下、類例を挙げよう。

12)a. He isn't the type of person *who # will devote his whole life to his career*.

b. He isn't the type of person *to devote his whole life to his career*.

(彼は、自分の一生を仕事に捧げるようなタイプじゃない。)

13)a. I'd like to give you little something (*which*) *you can remember us by #*.

b. I'd like to give you little something *to remember us by #*.

(僕達のことを思い出してもらうために、ちょっとした贈物をします。)

12b)では the type of person と devote his whole life... は主語・述語関係であり、13b)においては、little something と remember us by は目的語・動詞句関係である。なお、後者において、little something を目的語として支配しているのは remember ではなく、前置詞 by である。また、something に形容詞がつ

く場合には、一般に後置修飾となるが、「ちょっとした物」の意味で something に little がつく場合には、上例のように、例外的に前に置かれるのが通例である。

### 練習問題

次の関係節の部分を簡潔にし、更にその文の意味を述べよ。

- 1) I was always heavily involved in activities that were extracurricular.
- 2) That's a book which is about business executives.
- 3) Any teacher who is accustomed to a lecture course for fifty has difficulty teaching a seminar of eight.
- 4) I need a stool I can hit your head with.

### 解答

- 1) I was always heavily involved in *extracurricular* activities.  
(いつも課外活動に打ち込んでいた。)
- 2) That's a book *about business executives*.  
(それは管理職者についての本だった。)
- 3) Any teacher *accustomed to a lecture course for fifty* has difficulty teaching a seminar of eight.  
(50人の講義授業に慣れている教師は、8人のセミナークラスを教えるのに戸惑いを感じる。)
- 4) I need a stool *to hit your head with* #.  
(お前の頭を殴るためのイスが必要だな。)

### 受動態

動詞の後に名詞が残っている受動文には疑いを持って

\*He was stolen his baggage.

受動文に関して、1)の文の典型的な誤訳が2)である。

- 1)彼は荷物を盗まれた。
- 2) \*He was stolen his baggage.

これは、受動文とは「行為を受ける人」を主語にして、その後に「be 動詞 + 過去分詞」を続ければよい、と漠然と考えている場合の誤りである。

これがなぜおかしいのかを完全に理解するには、対応する能動文を考えてみ

ればよい。そこで、受動文を能動文にするには、

1. 受動文の主語は能動文では目的語となる
2. 受動文において by の後に来ている名詞が能動文の主語になる
3. 「be 動詞＋動詞過去分詞型」は動詞の不定形にし、それを対応する時制・アスペクトにする

という事がわかっていればよい。

ではこれを用いて 2)の文を能動文に戻して、これがなぜ不適切なのかを検証してみよう。

まず1によって、受動文の主語 he は能動文の目的語であるから、これを本来の位置に戻す。

- 3) \_\_\_ was stolen him his baggage.

次に、能動文の主語であるが、by で表わされた名詞が 2)にはないから、ここでは by someone を補ってやろう。すると、能動文の主語はこの someone である。

- 4) Someone was stolen him his baggage.

この時、2)では his baggage という名詞が余っているから、これを適当に主語にしよう、などと考えるはならない。

では3の動詞の部分に関しては、was stolen を steal にして、再度これを過去形にして調整してやると、stole となる。

- 5) Someone stole him his baggage.

これで受動文を正規の手続きによって能動文に戻すことができた。もし、2)のような受動文が正しければ5)も正しいはずであり、逆に、2)が不適切ならば、5)の受動態も不適切になるはずである。では、そこで5)を観察すると、まず気が付くのは動詞 steal のあとに名詞が2つ続いている、つまり二重目的語の文になっているということである。果たして、これは正しいのだろうか。

- 6) Someone stole [him][his baggage].

確かに、英語には give や buy のように二重目的語を取る動詞はいくつか存在する。

- 7)a. We gave [him][a surprise].

(彼にお土産をあげた。)

- b. I'll buy [you][a drink].

(一杯おごるよ。)

ところが、この動詞型を取れる動詞は厳密に決まっており、どの動詞でも適

当に用いていいというわけではない。事実、辞書を参照してわかることは、steal に関してはこのように2つの目的語を取ることができず、目的語は必ず1つでなくてはならない。つまり、次のような文型しか取れないのである。

8) Someone stole his baggage (from him).

このように、能動文における文型が正しく把握できていれば、あとは目的語を主語にすることによって、正しく受動化するおとができる。

9) His baggage was stolen # (from him).

もちろん、場合によっては日本語が受動文になっていても、英語では能動文のままにしておくことも考えられる。

10) Someone stole his baggage (from him).

なお、he を主語にして受動の意味を表わすには「have + 物 + 動詞の過去分詞」という構文で「物を～される」という意味を表わすこともできる。

11) He had his baggage stolen.

このように、受動態を使う場合には「be + 過去分詞」を使いながら一語一句を英単語に直すだけではだめで、必ず能動文の文型と対応させながら用いる必要がある。特に受動文にした場合、動詞（の過去分詞）のあとに、まだ名詞が残っているような文は、二重目的語を取る動詞の場合以外はあり得ないので要注意である。

### 練習問題

以下の受動文は全て不適切である。それぞれを能動文に直し、その文型が誤っていることを確認した上で、正しい能動文を作り、さらにそれに基づいて正しい受動文を作れ。

1)彼は頭を蹴られた。

\*He was kicked his head.

2)彼女はお金を盗まれた。

\*She was robbed her money.

3)その紙には「燃えよ!」と書いてあった。

\*The paper was written 'FIRE UP!'.

4)妹はよくかわいいと言われる。

\*My sister is often said that she is pretty.

### 解答

1)a. \*Someone kicked [him][his head].

b. Someone kicked his head. / Someone kicked at his head./ Someone kicked him on/in the head.

c. His head was kicked. / His head was kicked at. / He was kicked on/in his head. / He had his head kicked.

2)a.\*Someone robbed [her][her money].

b. Someone robbed her of her money.

c. She was robbed of her money.

\*Her money was robbed her of. \*She had her money robbed. は不可。steal A from B = rob B of A の関係になっている点に注意。

3)a.\*Someone wrote the paper 'FIRE UP!'.

b. Someone wrote 'FIRE UP!' on the paper.

c. 'FIRE UP!' was written on the paper.

\*The paper was written 'FIRE UP!' on. は不可。

4)a.\*People often say [my sister] [that she is pretty].

b. People often say to my sister that she is pretty. / People often tell my sister that she is pretty. say/tell いずれにおいても、that 節は目的語として機能している。

c. It is often said to my sister that she is pretty. 本来 that 以下が主語になるはずだが、文頭が重すぎるので仮主語 it を置いたもの。/ My sister is often told that she is pretty. \*My sister is often said to that she is pretty. は不可。

#### 随伴規則

「WH 語 + 名詞」には随伴規則を適用せよ

\*Which do you like car best?

\*How many do you have boyfriends?

\*Whose did you back up into car?

#### ● what/which + 名詞

「どのクルマが一番好き？」と聞く場合、次の文は不適切である。

1) \*Which do you like car best?

これを理解するために、まず「あのクルマが一番好き」という文を見てみよう。

2) I like that car best.

この文の目的語は that car であり、この部分を WH 疑問文で問う場合には、

それを who や which/what car にすればよい。

- 3) I like  $\left\{ \begin{array}{l} \text{what} \\ \text{which car} \\ \text{what car} \end{array} \right\}$  best.

この後、WH 語を文頭に移動し、疑問文の語順にすれば WH 疑問文ができる。さて、そこで問題になるのは、which car や what car の場合、WH 語だけを移動したのでは不適切になる点である（#は移動した語句の元の位置（＝「出所」）を示す）。

- 4)a. What do you like # best?

- b. \*Which do you like [# car] best?

これはなぜかという、this car が1つの名詞句として機能するのと同様、which car や what car といった「WH 語＋名詞」についても、それが1つの単位として機能するからなのである。よってこの場合、which/what と car は不可分であり、移動するのもペアでなくてはならない。

- 5)  $\left\{ \begin{array}{l} [\text{Which car}] \\ [\text{What car}] \end{array} \right\}$  do you like # best?

このように、「WH 語＋名詞」の部分が WH 移動する場合、WH 語だけではなく、それに修飾されている名詞もいっしょに文頭に移動させなくてはならない。これを随伴規則と呼んでおこう。

### ● how many ＋名詞

随伴規則は、「WH 語＋名詞」になっている限り、which や what だけではなく、他の疑問詞の場合にも当てはまる。たとえば「ボーイフレンドは何人いるの？」という文を作るとし、まず、その平叙文を考えてみよう。

- 6) You have three boyfriends.

この下線部を問えばいいわけである。数を聞く場合には「how many ＋名詞」を用いればよい。

- 7) You have [how many boyfriends].

次に、WH 移動をするわけであるが、how または how many の部分だけを移動すると非文になる。

- 8)a. \*How do you have [ # many boyfriends]?

- b. \*How many do you have [ # boyfriends]?

なぜなら、「WH 語＋名詞」の中の WH 語の部分だけを移動したからである。

随伴規則に従って、その部分をひとまとめにして移動すると、次のような適切な文が得られる。

9) [How many boyfriends] do you have # ?

● whose + 名詞

もう 1 つ類例として、「誰のクルマにバックでぶつかったんだい？」という疑問文を考えておこう。ここでも平叙文を考えると、次のようになる。

10) You backed up into Eddie's car.

「エディーのクルマ」というような所有を表わしている部分を聞くには whose を使えばよい。

11) You backed up into [whose car].

すると、ここでも whose car、即ち「WH 語 + 名詞」が表われてくる。そこで随伴規則を適用しながら WH 移動すると、12a)ではなく 12b)になる。

12)a.\*Whose did you back up into [ # car]?

b. [Whose car] did you back up into # ?

以上で見たように、「WH 語 + 名詞」の場合には、随伴規則を適用し、それ全体が WH 移動する点を忘れないようにしよう。

練習問題

次の文を英訳し、そこでの WH 語の出所を#で示せ。

- 1) 御家族は何人ですか。
- 2) どういうロックンロールバンドが好きなの？
- 3) ビールをどのくらい飲んだの？
- 4) 君の意見は誰の調査に基づいているのか。 (be based on, research)

解答

- 1) [How many people] are there # in your family? / [How many people] do you have # in your family?
- 2) [What rock'n roll band(s)] do you like # ? / [What kind of rock'n roll band (s) do you like # ? / [What (kind of) rock'n roll band] # is your favorite? / [What (kind of) rock'n roll band] is your favorite # ?

最後の 2 つの文に関して出所の位置が 2 種類考えられるのは、基になる平叙文が i) This band is my favorite. ii) My favorite is this band. というふうに、2 つ考えられるからである。随伴規則に関係しない What is your favorite rock'n roll band # ? も可。



3) [How much beer] did you drink # ? / [How many glasses of beer] did you drink # ? how much は不可算名詞の量を聞く場合に、how many は可算名詞の数を聞く場合に用いる。

4) [Whose research] is your opinion based on # ?

#### 随伴規則(2)

「how + 形容詞／副詞」には随伴規則を適用せよ

\*How is his language clear?

\*How did he speak fast at the meeting?

#### ● how + 形容詞

「彼の言葉使いはどのくらいはっきりしているのか？」と聞く場合、次の文は不適切である。

1) \*How is his language clear?

これを理解するために、まず「彼の言葉使いはとてもはっきりしている」という平叙文を見てみよう。

2) His language is very clear.

ここで「どのくらいはっきりしているのか」と聞くためには、「very clear かそうではないのか」を問えばよいから、2)の very の部分を WH 語 how にすればよい。

3) His language is [how clear].

この後、WH 語を文頭に移動し、疑問文の語順にすれば WH 疑問文ができる。ただしその際、「WH 語＋名詞」がそうであったように (cf. 「随伴規則(1)」)、how だけを文頭に移動すると非文になる。

4) \*How is his language [# clear]?

これはなぜかと言うと、very clear が1つの形容詞(句)として機能しているのと同様、how clear のような「how + 形容詞」についても、それが1つの単位として機能しているからなのである。よってこの場合、how と clear は不可分であり、移動するのもペアでなくてはならない。

5) [How clear] is his language # ?

このように、「how + 形容詞」の部分が WH 移動する場合、WH 語だけではなく、それに修飾されている形容詞もいっしょに文頭に移動させなくてはならない。これを随伴規則(2)と呼んでおこう。

## ● how + 副詞

同様のことは、「how + 副詞」に関しても当てはまる。「彼は会議でどのくらいの早さでしゃべったんだい？」という場合、次のようには言えない。

8) \*How did he speak fast at the meeting?

なぜなら、これに対応する平叙文は9)である。

9) He spoke very fast at the meeting.

この very fast の部分の程度を聞きたいわけだから、very を how にすると次のようになる。

10) He spoke [how fast] at the meeting.

そこで WH 移動させるわけだが、how だけを移動すると8)のように不適格になる。そこで随伴規則(2) を適用すると、次のような正しい文が得られる。

11) [How fast] did he speak # at the meeting?

このように、「how + 副詞」においても随伴規則が適用され、how だけではなくその部分全体が WH 移動することになる。

## 練習問題

1. 次の文を訂正せよ。

1) \*How did you push him hard?

(どのくらいの強さで彼を押したんだ?)

2) \*How do you often exchange business cards a day?

(1日に何回ぐらい名刺を交換しますか。)

3) \*How were you ashamed to hear that?

(それを聞いてどのくらい恥ずかしかった?)

2. 次の文を英訳し、更に「how + 形容詞／副詞」の出所を#で示せ。

1) あいつに会ったとき、どのくらい怒ってた?

2) どのくらいのスピードで本を読める?

3) どのくらいで彼は帰ってきますか。

## 解答

1.1) How hard did you push him # ?

2) How often do you exchange business cards # a day?

この場合の how often は実質的には how many times に等しい。よって答える場合にも 80 times a day. など言うことになる。別の構造を用いて How many business cards do you exchange # a day? ととも言える。

- 3) *How ashamed* were you # to hear that?  
 2.1) *How mad/angry* # was he when you met him?  
 2) *How fast* can you read books # ?  
 3) *How soon* will he be/come back # ?

使役動詞

使役動詞 make/let/have はどう違うのか  
 ?I made my teacher correct my English.

「人に～させる」という意味を表わし、「動詞＋目的語（人）＋動詞の原形」という構文を取る使役動詞に make/let/have がある。日本語の定義だけでは混乱しやすいが、次のような明確な違いがある。

まず、make は「強制する；相手がしようとしていないことをさせる = force」ということである。

- 1) He *made* them work till late last night.  
 （昨夜遅くまで働かせた。）

- 2) She *made* the dog wait outside.  
 （犬を外で待たせた。）

よって、同様の意味が force を用いて表わせる。

- 3) He *forced* them to work till late at night.

ただし、force の場合は「動詞＋目的語＋to 不定詞」の文型になる。

次に、let は「許可／認容にする；相手がしようとしていることをさせる = allow」という意味である。

- 4) They *let* me call my lawyer.  
 （弁護士に電話をさせてくれた。）

- 5) Don't *let* him go; I really need to talk to him.  
 （彼を帰らせないように。話さないといけないことがある。）

この場合は allow でパラフレーズできる。文型は force 同様「動詞＋目的語＋to 不定詞」である。

- 6) They *allowed* me to call my lawyer.

3 番目として、have は「依頼する、相手が～するように頼む、してもらう = ask/persuade」という意味になる。

- 7) I *had* our teacher correct my English composition.

(英語の先生に英文を直してもらった。)

8) I want to have the artist paint my portrait.

(画家に肖像画を書いてもらいたんだが。)

この場合は ask や persuade でパラフレーズできる。

9) I asked our teacher to correct my English composition.

このように、make/let/have は文型は同じで意味も似ているが、上記のような違いがあるのでよく文脈に注意する必要がある。

### 練習問題

次の文の意味の違いを述べよ。

- |             |          |                                               |
|-------------|----------|-----------------------------------------------|
| 1) The boss | [ made ] | him travel to Nashville to collect some data. |
| 2)          |          | let                                           |
| 3)          |          | had                                           |

### 解答

1)は「上司は、彼が行きたくないと言っているのに、情報を集めにナッシュビルに行かせた」の意味で強制を示している。2)は「彼自身が行きたいと申し出ているので行かせた」という意味で許可を示している。3)は「上司が彼に頼んで行ってもらった」という依頼を示している。

### 動詞

他動詞は名詞を取り、自動詞は取らない

\*We should discuss about this matter immediately.

### ●日本語における名詞と動詞の結びつき

英語を使いこなす上で基本となることは、動詞と名詞の結び付きである。これは日本語と英語では、似ている部分とそうでない部分があるから、注意する必要がある。そこでまず基本となる自動詞の他動詞の区別を見ていこう。

日本語では、動詞と名詞の種々の結び付きは、格助詞を用いて示される。

1)a. ドイツへ飛ぶ

b. 郊外に住む

c. ラッシュ時を嫌う

d. 朝から晩まで働く

こうした格助詞によって、同じ動詞を使っても、名詞との意味関係は様々に

変化する。

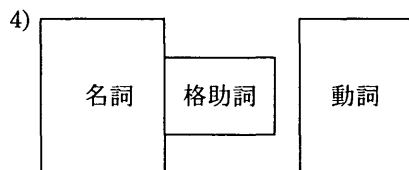
- 2)a.ドイツへ飛ぶ  
b.ドイツから飛ぶ  
c.ドイツまで飛ぶ

よって、日本語では、名詞と動詞が格助詞抜きで直接結び付くことはない。

- 3)\* ドイツ飛ぶ

(ただし、口語では「ロック好き?」「東京行ってみよう」のように、誤解を生じない限り格助詞なしで用いることもある)

なお、こうした格助詞は必ず名詞の後に来ており、その「名詞+格助詞」全体は動詞の前に生じることに注意しておこう。



#### ●英語における名詞と動詞の結び付き

その点、英語では名詞が直接動詞に後続する場合がある。

- 5) I had a fight with my wife yesterday.

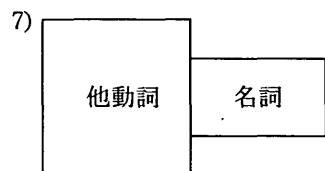
(昨日、妻と喧嘩した。)

- 6) He got a funny feeling then.

(その時、彼は変な気持ちがした。)

ここで日本語とは違って、格助詞がなく、名詞が動詞の後に来ている点にも注意する必要がある。

このように、直接後ろに名詞を取れる動詞を「他動詞」(transitive verb)と呼ぶ。また、後続する名詞のことを、その動詞の「目的語」(object)と呼ぶ。



日本語でも「持つ」というと、必ず「～を持つ」という格助詞を取り、決して「\* ～へ持つ、\* ～に持つ」とはならない。このように、動詞と名詞の基本的意味関係が一定している場合、英語では名詞と動詞が直接結び付く。

その点、「話す」という動詞ならば「(事柄)について話す」ことも「(人)と話す」場合もあり得る。よって、英語の talk についても、種々の名詞との意味関係を表わすため、日本語の格助詞に相当する部分を持つことがある。それが「前置詞」(preposition)である。

8) She *talked about* her divorce (with her lawyer).

このように、直接後ろに名詞を取れない動詞のことを「自動詞」(intransitive verb)と呼ぶ。直接名詞を取れないから、名詞と結び付く必要がある場合には、前置詞を用いる。



ここで、後続する名詞は動詞に直接続いているわけではないから、その動詞の目的語ではない。この名詞は「前置詞の目的語」と呼ばれる。

これは 4)に示した日本語の構造と似ている。ただし、それぞれの要素の順序は全く逆で、英語では前置詞は名詞の前に置かれ、「前置詞＋名詞」全体は動詞の後ろに生じる。

よって、次のように、他動詞である discuss を前置詞を使って自動詞的に用いると不適格である。

10) \*We should *discuss about* this matter immediately.

(この問題は、すぐに話し合わなくちゃいかん。)

当然、次のように、名詞を直接続ける必要がある。

11) We should *discuss* this matter immediately.

## ● 2つの用法を持つ動詞

ただし、動詞によっては、自動詞・他動詞両方の用法を持つ場合もあり、むしろそれが普通である。よって、基本的動詞については、いずれかで用いられるのか、それともいずれでも用いられるのかを知っておく必要がある。

たとえば、speak には2つの用法がある。

12)a. He speaks very fluently.

(彼はよどみなく話す。)

b. He speaks French very fluently.

(彼はフランス語を流暢に話す。)

このように、単に *speak* だけでも用いることができるし、*speak French* のように名詞を取ることもできる。ただし、その場合にも、「彼に話す」のつもりで *\*speak him* とは言えない。この場合は

13) I spoke (French) to him.

のように、話相手の方には前置詞 *to* (または *with*) が必要である。

●他動と自動詞の違いを明確に

日本語では名詞と動詞が結び付くとき、必ず格助詞が必要であった。英語では「動詞＋名詞」のように両者が直接結び付く場合と、「動詞＋〔前置詞＋名詞〕」のように、前置詞を介する場合とがある。前者の場合を他動詞、後者の場合を自動詞と呼ぶ。

これは逆に言うと、他動詞は常に後ろに名詞が必要であり、自動詞では全く無くてもいいということになる。

14) 他動詞

a. 他動詞＋名詞

b. \* 他動詞＋0 (不可)

15) 自動詞

a. 自動詞＋0

b. 自動詞＋〔前置詞＋名詞〕

c. \* 自動詞＋名詞 (不可)

このように、英語を使う際には、両者の識別が的確にできるようにしておきたい。更に、1つの動詞でも、2つの用法を兼ね備えている場合が多いので、どういう場合に、どちらの形が使われるかも、基本動詞については知っておく必要がある。

練習問題

下線部の動詞は自動詞か動詞かを述べよ。

1) John eats very fast. (ジョンは食べるのが早い。)

2) John eats breakfast at ten. (ジョンは朝御飯を10時に食べる。)

3) The answer came from a little old lady. (答えは、小柄な老婦人から返ってきた。)

4) No one would remember the incident. (この出来事は誰も覚えていないだろう。)

5) Keep away from this wall. (この壁には近寄らないように。)

## 解答

- 1) 自動詞。very fast は副詞なので、目的語ではない。
- 2) 他動詞。目的語は breakfast。
- 3) 自動詞。a little old lady は前置詞 from の目的語。
- 4) 他動詞。目的語は the incident。
- 5) 自動詞。away は副詞。

## 動詞(2)／伝達動詞

引用句を取れる伝達動詞は that/wh/if 節を取れる他動詞

\*John spoke, "I came to find the secret of budget deficits."

人が言ったことを伝える動詞を「伝達動詞」(reporting verb)あるいは「発話動詞」(verb of saying)と呼ぶ。このなかには、直接人が言った内容を引用できるもの、すなわち直接話法で用いることができるものがいくつかある。

- 1) "I'm confused," I told him.

(「頭が混乱してるんだ」と彼に言った。)

- 2) He said, "If one spends more than one earns, then one must borrow what one owes."

(「もし儲けるより使うのが多ければ、赤字の部分だけ金を借りなきゃいけないのさ」と彼は言った。)

- 3) The interviewer asked him, "Is it your opinion, sir, that nothing can be done about this matter?"

(「そうするとこの点については、何もできないというお考えなんでしょうか」と記者は彼に尋ねた。)

- 4) "You'll be sorry for this," the rascal shouted.

(「後悔するぞ」とそのやくざ者は叫んだ。)

ところが、発話を意味するものでも、次のような動詞は引用句を取ることができない。

- 5) \*I spoke/talked, "I'm confused."

ここで理解しておくべきことは、直接引用できる動詞は that/wh/if 節のいずれかを目的語にできる他動詞だということである。



- 6) He  $\left\{ \begin{array}{l} \text{said} \\ \text{told them} \end{array} \right\}$  that Eddie was working on that.

(それはエディがやっていると彼は言った。)

- 7)a. Larry *asked* him what he could suggest.

(ラリーは彼にどういう提案があるか聞いてみた。)

- b. Larry *asked* if my folks were in good shape.

(ラリーは私の家族は元気かどうか尋ねた。)

- 8) The rascal *shouted* to him that he would be sorry for that.

(悪漢は後悔するぞと彼に叫んだ。)

- 9) \*He *spoke/talked* that Eddie was working on that.

このように、引用文というのは、ただ後続しているのではなく、that 節等と同様、動詞の目的語になっている点に注意する必要がある。だから、節を目的語にできない動詞が引用句を取れないのは当然である。

逆に言うと、that/wh/if 節のいずれかを取れるなら、直接引用が可能な動詞であると考えて、ほぼ差し支えない。よって、次のような動詞は引用符を用いた直接引用が可能である。

- 10) add (付け加える), admit (認める), announce (知らせる), answer (答える), argue (主張する), assert (断言する), ask (尋ねる), beg (頼む), boast (自慢する), claim (言い張る), comment (論評する), complain (不平を言う), conclude (結論を下す), confess (告白する), cry (叫ぶ), declare (断言する), exclaim (叫ぶ), explain (説明する), insist (言い張る), maintain (主張する), note (言及する), object (反対する), observe (述べる), order (命令する), promise (約束する), protest (主張する), recall (思い出して言う), remark (述べる), repeat (繰り返す), reply (答える), report (伝える), say (言う), scream (叫ぶ), shout (叫ぶ), state (述べる), tell (述べる), think (思う), urge (力説する), warn (警告する), whisper (囁く), wonder (知りたいと思う), write (書く)

ただし、引用句が可能とは言っても、各動詞にはそれぞれの動詞型があるので、これを混同しないこと。例えば誰に対してその行為を行なうかという点については、二重目的語を取る動詞ならば、「動詞＋人＋引用句」でよい。

- 11) He *told* me, "I'm not at liberty to say."

(勝手に話はできない)と彼は私に言った; tell の場合、話す相手は必ずつけて tell someone, "..." の形になり、\*tell, "..."は不可)

12) He *asked* her, "What do you suggest?"

(「いい案はあるかい?」と彼は彼女に聞いた; ask, "..." でも可)

ところが、次のような動詞は二重目的語は取れないので、前置詞が必要。

13) He *said* to me, "I'm not at liberty to say."

(「話す立場にない」と彼は言った; \*say someone, "..."は不可。say, "..."ならば可)

14) "Let's get crazy," he *suggested* to us.

(「一緒に楽しくやろう」と彼は我々を誘った; \*suggest someone, "..."は不可。suggest, "..."は可)

以上のように、直接引用を用いる際には、それが that/wh/if 節を取れる動詞かどうかを確認し、さらにその動詞型に注意しなくてはならない。

### 練習問題

直接引用をする場合、以下の文はこのままでは不備がある。なぜ不備があるのかを指摘した上でそれを訂正し、さらに文の意味を述べよ。

1) \*They said me, "I see what you mean."

2) \*The reporter told, "It will cost \$80,260 to raise a child born this year until it reaches age eighteen."

3) \*He talked to me confidently, "I won't let you down."

### 解答

1) say は二重目的語を取れない動詞であるにもかかわらず、このままでは me と引用句の2つの目的語を取ることになるから不可。They said to me / told me, "I see what you mean." (「言いたいことはわかった」と連中は私に言った)

2) tell を使うなら、必ず誰に対して述べたかが必要。The reporter told us / said, "It will cost \$80,260 to raise a child born this year until it reaches age eighteen." (記者は「今年生れた子供を18才迄育てるのに必要な経費は80,260ドルである」と述べた。)

3) talk は that/wh/if 節のいずれかを取れる他動詞ではないので、直接引用することはできない。He told me / said (to me) / promised confidently, "I won't let you down." (「君(の期待)を裏切ったりはしないよ」と彼は自信ありげに言った[約束]した。)

## 副詞節

言った内容かどうか：副詞節・句の移動

He said that he had met the man *when he was walking*. ≠ *When he was walking*, he said that he had met the man.

ここでは目的語の中で、副詞節が移動する場合を考える。ではまず最初に、英語では他動詞の目的語はその動詞のどちら側に来るのかということを考えてほしい。

## 1) A 動詞 B

もち論 eat apples, drive a car などを見てわかるようにBの側、すなわち動詞の右側に目的語が生じる。では日本語ではどうか。今度は「リンゴを食べる」「クルマを運転する」という風に、Aの側、つまり動詞の左側に目的語が生じている。

だから英語の say, know, remember などのように、文がその目的語になる場合にも目的語はその右側に来る。

## 2) say [            ]

ではここで、He said に続けて「歩いている時にその男に会った」という内容の目的語を設定しよう。すると次のようになる。

## 3) He said that [he had seen the man when he was walking].

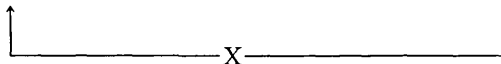
ここで [    ] 内が言った内容となる。重要な点は、say の右側にあるのが say の目的語であるから、[    ] 内で2つの節(he had seen the man, when he was walking)の順番を入れ換えても知的意味は同じである。これを図示すると次のようになる。

## 4) He said that [ A when B ]. = He said that [ when B, A ].

つまり5)は3)と同じ事を言っている。

## 5) He said that [when he was walking, he had seen the man].

ところが、たとえば when 節を say を越えて左側に移動することはできない。なぜなら、そこはもう say の目的語の位置ではないからである。

6) *When he was walking*, he said that [ he had seen the man #    ].

6)で述べているのは「歩いている時に言った」ということであり、「歩いて

いる時に会った」という結びつきにはならない。よって言った内容の一部を say を越えて左側に持って行くと、意味が異なってしまうことがわかる。

この点日本語では逆である。「言う」という動詞の目的語はその左側に生じる。

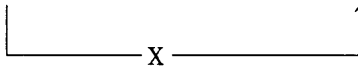
7) [            ] と言う

よって、副詞節は [    ] 内にある限り比較的自由に動き回れる。

8) [歩いている時にその男に会った]  
     [その男には、歩いている時に会った]  
     [その男に会ったのは歩いている時だ]      } と言った。

ところが、いったん [    ] を越えて移動すると意味は全く異なってしまう。

9) [ # その男に会った ] と 歩いている時に 言った。



これでは、歩いている時にした行為は「会った」ということではなく「言った」ということになってしまい、8) とは全く知的意味が異なる。

なお以上のことは、日英語とも、単に副詞節の場合だけではなく、副詞(句)の場合にも当てはまる。以下の文を比較すること。

10)a. He told me that I should call her on *Monday*.

(彼女に月曜日に電話をしておいた方がいいよと彼は言った。)

b. On *Monday* he told me that I should call her.

(彼女に電話を入れといた方がいいよと、彼は月曜日に言った。)

ではこうした事を念頭に置いた上で、こんな状況を考えてみよう。ある人がアメリカ滞在中に手紙をくれた。それをすっかり忘れていたのだが、日本に帰ってから、それを思い出した。ではこれを表わす次のような文を英訳してみよう。

11) アメリカにいる時に彼が手紙をくれたのを思い出した。

これを「アメリカにいる時に」は when I was in the United States, 「彼が手紙をくれたのを思い出した」は I remembered that he had written to me だからということで、日本語の語順そのままに次のような文にしたらどうだろう。

12) *When I was in the United States*, I remembered that he had written to me.

これは当然間違いということになる。一見日本語をそのまま置き換えていって正しそうであるが、上で述べた日英語の目的語の位置を無視してしまってい

る。11) では remember 目的語はあくまでその右側にある部分だけである。つまり he had written to me た確かに remember の目的語であるが、when I was in the United States は決してそうはならない。このままでは、この部分は he had written to me ではなく I remembered の方を修飾しており、結局意味するところは「彼が手紙をくれたことを、アメリカ滞在中に思い出した」ということになってしまう。よって正しい位置に目的語を持っていくと次のようになる。

13) I remembered that [ he had written to me *when I was in the United States* ].

このように、副詞節が目的語の一部である場合には、日英語の目的語の位置をよく考慮に入れなくてはならないのである。

### 練習問題

英訳せよ。

- 1) 皿洗いをした後で手伝うよと彼は言った。
- 2) この写真を見た途端、彼女は泣き出すと思うな。
- 3) 2010 年には自分はもう生きてはいまいと彼は力なく言った。

### 解答

- 1) He said (that) he would help me *after he finished doing the wash*.
- 2) I think she will start crying *as soon as she sees this picture*.
- 3) He said feebly that he would not be alive in 2010.

## 参考文献

- Axelrod, R.B. & Cooper, C.R. (1988) *The St. Martin's Guide to Writing*, St. Martin's.
- Bolinger, D. (1977) *Meaning and Form*, Longman.
- 萩野俊哉(1989)『ライティングのための英文法』大修館書店.
- 磐崎弘貞(1990)『英英辞典活用マニュアル』大修館書店.
- \_\_\_\_\_ (1995)『続・英英辞典活用マニュアル』大修館書店.
- Iwasaki, H. (1999) 'Learners, collocations and monolingual dictionaries,' *Studies in Foreign Language Teaching* 21 (University of Tsukuba), pp. 27-39.
- 加藤恭子・Hardy, V. (1992)『英語小論文の書き方』講談社.
- 小寺茂明(1989)『日英語の対比で教える英作文』大修館書店.
- 松井恵美 (1979)『英作文における日本人的誤り』大修館書店.
- 松本安弘・松本アイリン (1976)『あなたの英語診断辞書』北星堂.
- 望月昭彦 (1991)『英作文用法事典 I』大修館書店.
- \_\_\_\_\_ (1994)『英作文用法事典 II』大修館書店.
- 小笠原林樹(1997)『日本人英語の誤用診断事典』研究社.
- Quirk, R. et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman.
- Richards, J.C. (ed.) (1974) *Error Analysis*, Longman.
- Swan, M. (1995) *Practical English Usage* (2nd ed.), Oxford University Press.
- 天満美智子(1998)『新しい英文作成法』岩波書店.